

# 「アダム・スミスの価値尺度論」に関連する V. W. ブレイドゥンの所論（1974年）

——「アダム・スミスの価値尺度論」についての  
海外における諸研究(17)：1970年代(その6)——

中 川 栄 治

## 序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関係する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1、第2、第3、第4号において、それぞれ、19世紀末から1910年代、1920年代、1930年代、1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、本誌第5巻第2および第3号において1950年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、また、本誌第6巻第1、第2、第3、第4号および第7巻第2号において1960年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、なし、そしてそれにつづいて、本誌第9巻第1、第3号および第10巻第1、第2、第3号では1970年代に発表されたいくつかの個々の研究の内容を整理しようとしてきた。

本稿は、前五稿にひきつづき、1970年代に海外において発表されかつわたくしがみることのできた個々の研究の内容を整理する試みの一部として、1974年に出版されたV. W. ブレイドゥン (V. W. Bladen) の一著書のなかで示されている「アダム・スミスの価値尺度論」に関連をもつブレイドゥンの所論の内容を整理しようとするものである。

### V. W. ブレイドウン (1974)<sup>(1)</sup>

ブレイドウンは、1974年の彼の著書の第1篇「国富論」において『国富論』におけるスミスの議論を検討する過程で、以下のような見方を示している。

① スミスは事物の「真実価格」(‘real price’)という言葉を用いて、「それを獲得するための労苦と骨折り」ということを意味するものとして用いている (Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited...by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library <New York: Random House, 1937>——以下、W. N. と略記する——, p. 30. 大河内一男監訳『国富論』<全3巻>, 中央公論社, 1976年——以下、大河内訳と略記する, ただし, 本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない, また, 本稿で取り扱われるすでに邦訳の出版されている他の文献からの引用文の訳についても同様——<I>, 52ページ。)。この意味で, スミスのいうこの「真実価格」とは, 労働の質が改善されるにつれて, 労働者がそれを用いて働くところの設備の量と質が増進するにつれて, また, 技術が改良されるにつれて, 低下するもの, 生産性と表裏の<sup>(2)</sup>関係にあるもの, である。なお, スミスのいうこの「真実価格」という術語に関してつぎの二点に注意しておくことが必要である。その一つは, スミスはときとして「真実価格」を表すために「価値」(‘value’)という言葉を使用しているということである。<sup>(3)</sup>第二の点はつぎのことである。すなわち, スミスのいう「真実価格」という概念は明確なものであり, また, それへの関心は当を得たものではあるけれども, それを測定したりその諸変化を測定したりするという問題は非常に困難なものであって, 事実, 生産性の測定ということは非常に困難なことで, 現代の経済学者もそれにはまだ完全には成功していないのであり, スミスは「真実価格」の諸変化についてのおおよその指標しか提供しえなかったのではあるけれども, 「真実価格」の諸変化を測定することに対する彼の関

心と、交換価値の決定を説明することへの彼の関心とを、混同してはならない<sup>(4)</sup>、ということである<sup>(5)</sup>。

② 他方、「価値」(‘value’)という言葉には多くの意味があるが、経済学者たちにとっては、それは、一個の精確な意味をもっている。すなわち、財貨(もしくはサービス)の価値とは、それが市場において交換されるであろうなんらかの他の財貨もしくはサービスの量なのである。これは、明確で、観察することができ、測定することのできるものである<sup>(6)</sup>。なお、我々は貨幣経済にかかわっているため、こんにち我々は、価値について語るといったことはめったになく、むしろ、価格(price)について、すなわち、一つの財貨もしくはサービスが交換されるであろうところの特に選ばれた一つの別の財貨すなわち貨幣の量について、語るのであるが<sup>(7)</sup>、我々が価値について語ろうとあるいは価格について語ろうと、我々が二つの事物の間のある関係ということにかかわっているということは明らかなことである。我々が定義した用いているものとしての「価値」というもののなかには、内在的なものはなにも存在しないのであり、どんな一財貨の価値も孤立的には語られえないのである。価値が変化するとき、たとえば、B 2 単位との交換に用いられていたA 1 単位がいまやB 3 単位と交換されるとき、価値において上昇したのはAであってBが価値において低下したのではないといったことは、言うことはできないのである(逆もまた同様)。そして、スミスがそのような誤りをおかしているように思えるときには、彼が「価値」という言葉を我々のいっている意味で用いているのか否かを、注意深く考えてみななければならないのである<sup>(8)</sup>。

③ もちろん、AとBとの間の交換関係における変化は、たとえば、B にはなくAに影響を与えたなんらかの技術上の改良の結果である、といったことを示すことはできるかもしれない。このときには、スミスの「真実価格」という用語は有用なものとなる。すなわち、この場合には、Bの「真実価格」は不変にとどまっていたのに、Aの「真実価格」が低下した、ということになるのである。だが、諸商品の価値(あるいは価格)におけ

る変化そのものは、それらの諸商品の真実価格における諸変化そのものを知らせはしないのであり、それは、相対的諸真実価格における諸変化を、おおよそのところで、反映するだけなのである。<sup>(9)</sup><sup>(10)</sup>

④ 他方、「価値」とは、相対的な概念であるから、ある商品 (A) の価値がたとえば1800年と1900年の間に低下あるいは上昇したといったことは言うことはできない。正当に言うことのできるのは、BのタームでのAの価値は1900年におけるよりも1800年におけるほうが高かったあるいは低かったということだけである。つまり、諸価値の階層関係 (hierarchy) におけるAの位置が変化してしまっているというだけのことなのである。たしかにスミスは経時的に変化する小麦の価値について語ろうとしている、しかし彼は、他の諸事物と相対的な関係にあるものとしての小麦価値の諸変化といったことを考えようとしているわけではないのである。この脈絡においては、スミスは、「真実価格」のことを言おうとしているのである。すなわちスミスは、事物一般、また、特定の諸事物がより容易に入手できるようになっているか否かという歴史的な問題にたずさわろうとしているのである。<sup>(11)</sup>

⑤ また、スミスは、「労働支配力」('labour command') としての所得という考えをもっていたのであり、<sup>(12)</sup>そして、『国富論』では、労働に対する支配力としての所得というその考えは、「あらゆる物が、それを獲得した人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値うちがあるかといえは、……それによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである」という見解 (W. N., p. 30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ。)へと、通じているのである。ところが、いま見た一節が含まれているパラグラフの次にくるパラグラフのなかでは、「彼の財産の大きさは、……その財産で彼が購買または支配しうる他の人々の労働の量、または同じことであるが、他の人々の労働の生産物の量、に正確に比例する。あらゆる物の交換価値はその所有者にもたらされるこうした力の大きさにつねに正確に等しいにちがいない」

といったことが述べられている(*W. N.*, p. 31. 大河内訳〈I〉, 54ページ)。もちろん、ここでは、一つの価値理論 (a theory of value) が提示されているのではなく、スミスはここでは「真実」価値 ('real' value) あるいは「真の値うち」 ('real worth') についての定義を提示しようとしているのであるが、実質的には、そこには異なる二つのことが述べられているのである。このことから分かるように、スミスを理解するためには、彼が「価値」という言葉を使用するとき、さらに、「交換価値」 ('exchangeable value') という言葉を使用するときさえ、そこでは彼は、当該財貨が交換されるであろう (交換されると予期されうる) ところの他の事物の量 [つまり、上記②等で見られたような意味での、その財貨の「価値」] のことを言おうとしているのか、それとも、その財貨が交換されるであろう (交換されると予期されうる) ところの平均的労働の量 (人時、延べ労働時間: man-time) [つまり、スミスの言うその財貨の「真実」価値あるいは「真の値うち」] のことを言おうとしているのか、ということ識別するよう注意を払わなければならないのである。<sup>(13)</sup>

⑥ ところで、こんにち、ジャーナリストたちは、たとえばカナダとソビエト連邦とにおいて一枚のシャツの代金を稼ぐにはどれほどの労働時間が必要であるかということ、語ろうとするのであるが、スミスも、国際間の比較のための、「特定財貨の労働支配力」という考えの使用ということに、触れている、しかし、彼がこの考えを用いたのは、主に歴史的な考察のためであった。スミスは、特定財貨の労働支配力 [つまり、その財貨の「真実価値」あるいは「真の値うち」] における経時的な諸変化が、そのような財貨の「真実価格」 [つまり、その財貨を獲得するための「労苦と骨折り」] における諸変化の有用な指標である、と信じていたのであり、また、彼がそのように信じていたということは、理に合わないことでもなかったのである。<sup>(14)</sup>

⑦ なお、スミスは、『国富論』第1篇第4章の終わりのところで、「財貨の相対価値または交換価値とよびうるものを決定する」(*W. N.*, p. 28.

大河内訳〈I〉, 49ページ。) ルールの検討にすむという彼の意図を述べるのであるが、スミスはまず、「ある特定の対象物の効用をあらわす」ものとしての価値と、「その対象物の所有から生じる他の財貨にたいする購買力をあらわす」ものとしての価値とを区別し、そして水とダイヤモンドの価値のパラドックスについて述べ<sup>15)</sup>、そののち、それにつづく若干の諸章での諸商品の交換価値を規制する原理の究明ということに関連して、それらの諸章で取り扱うべき問題を列挙している。人は、そのような叙述の後に展開される第5章「諸商品の真実価格と名目価格について、すなわち、それらの商品の労働での価格と貨幣での価格について」は、我々が「価値理論」とよぶものを、すなわち、特定の諸商品の、市場交換価値もしくは均衡交換価値の説明、あるいは、特定の諸商品の価格の説明といったことを、取り扱うであろうと予期してきたのであった。ところが、実際には、この第5章は、スミスの言う他財貨にたいする購買力としての交換価値の、したがってまた我々も受け入れている意味での価値の、決定<sup>16)</sup>ということを取り扱っていたのではなく、生産性が変化——概していえば、向上——するのにつれての、特定財貨の「真実価格」、「人時価格」(‘man-time price’)における諸変化の測定<sup>16)</sup>ということを取り扱っていたのである。

⑧ 結局のところ、スミスの主題は、諸国民の富についての一考察ということであったのであり、そしてそのような富は、生産性の向上につれて、増加するのである。<sup>17)</sup> かくしてスミスは、変化する生産性についての考察ということに乗り出すこととなり、また、その測定にまつわる手ごわい諸困難に出くわすこととなるのであるが、彼はその問題を、生産性と表裏の関係にあるものとしての「真実価格」のタームで言い表したのであり、そして彼は、生産性よりもむしろ「安価さ」(‘cheapness’) [つまり、「真実価格」の低さ] について語ったのであるが、それは、同一問題を攻克するいま一つの方法であるにすぎないのである。<sup>18)</sup>

⑨ もともとそのようなものの測定ということには手ごわい諸問題が存在するのであるが、スミスもまたそれらの問題に出くわしていたのであり、

そして、それらの問題にたいする彼の解決法は満足のものということからはほど遠いものではあったけれども、彼は、重要でかつ困難な諸問題を尋ねていたのである。それゆえ、彼の解答は、それらの問題の観点から検討されなければならないのであって、彼の解答は、我々が彼が尋ねると予期した諸問題に対する解答と考えられてはならないのである。スミスが第5章において、そしてさらに第11章<sup>(19)</sup>において探究していたのは、真の「安価さ」ということなのである。<sup>(20)</sup>

⑩ なお、スミスが第5章また第11章で探究していたのはこの真の「安価さ」、真実価格の低さということであったのであるが、他方でスミスの議論には、相対的な真実価格における諸変化は「価格」〔つまり、当該事物と交換される貨幣の量〕における諸変化に反映されるであろう〔異時点間で比べられた一事物の「真実価格」の諸変化、一事物の「真実価格」の経時的な諸変化は、その当該事物の「価格」の経時的な諸変化に反映されるであろう〕という想定が存在していたのであり、そしてこのことは、「労働価値説」への固執を示すものと考えられるかもしれない。だがスミスはそこでは、経時的な諸変化について語っているのであって、ある所与の時点での価格の決定について語っているわけではないのである。また、特定諸財貨のあいだの相対的な価値における長期的な諸変化は、それらの財貨の相対的な諸真実価格における諸変化と、同一方向でかつ、おおよそ同一の大きさのものになるであろう<sup>(21)</sup>ということを認めるためには、ある所与の時点での均衡価値は相対的な労働費用によって適切に説明されると考えなければならない、というわけでもないのである。<sup>(22)</sup>

⑪ ところで、うえでみたような意図のもとで展開されている第5章は、(1)人は、「自分が支配できるその労働の量におうじて富んでいたり貧しかったりするにちがいない」(W. N., p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。), (2)「あらゆる物の真実価格は、……それを獲得するための労苦と骨折りである」(W. N., p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。), (3)「あらゆる物が、それを獲得した人にとって……、真にどれほどの値うちがあるかといえば、…

…それによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである」(W. N., p. 30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ。)といった考えの提示をもって始まっている。これは、継続する経済プロセスについての人間を中心にした見方である。しかしスミスは、それにまつわる多くの困難の存在に気づいていたのであり、そしてそれらの困難のうちのいくつかのものと取り組んだのであった。<sup>(23)</sup>

⑫ まず、労働の質は均一的でない、ということである。<sup>(24)</sup> この問題にたいしてスミスは、「市場のかけひきや交渉」から生じる評価を用いるといった解決法を提示している (W. N., p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ)。たしかにこの解決法は非常に満足のいくものというわけではない。だが、これと同じ問題には現代の研究者たちも悩まされているのであり、そして、たとえその問題に正確な解答を与えることは不可能であるとしても、おおよそその、しかしことによるとたいへん有用な解答の可能性を探求することそれ自体を拒否すべきかといえ、それは問題である。<sup>(25)</sup>

⑬ なお、スミスは、商品の「真実価値」〔つまり、その商品によって他の人々に課することのできる労苦と骨折り〕の諸変化の尺度となるべきものは、ふつう考えられているような、その商品と交換されうる貨幣の量、貨幣価格ではなく、その商品が支配しうる労働の量であるということを、示そうとしている。ここで注意しておくべき点は、スミスが貨幣は不十分な尺度であるとするときには、ある所与の時点における諸相対価値の尺度としてではなく、「真実価値」の諸変化の尺度としてなのだ、ということである。<sup>(26)</sup> また、『国富論』第1篇第5章を全体として注意深く研究し、さらに、第8章における文言、および第11章における諸概念の使用法、について注意深く研究してみれば、スミスは主に、「真実価格」〔つまり、当該事物を獲得するための労苦と骨折り〕における諸変化の測定ということに、関心をいだいていたということ、そして、「労働支配力」における諸変化へのスミスの関心は、「労働支配力」における諸変化は「真実価格」における諸変化の最も良好な(ただし正確なことからはほど遠いもので



はあるけれども) 指標となるものであるという彼の確信から、生じているということは、明らかなことであるように思えるのである。ただし、「<sup>(28)</sup> 真実価格」における諸変化と「労働支配力」における諸変化との間のこのおおよその相関ということは、ある所与の時点における均衡価値についての一つの単純な労働説といったものを暗に示しているものではなく、またそれは、なんらかの機械的な相関という意味を含んでいるわけでもないのである。すなわち、スミスは、「真実価格」における変化が供給事情の変化を経て「労働支配力」における変化を引き起こすプロセスに、十分に気づいていたのであり、さらにすすんで第11章では彼は、供給事情の変化と同じように需要事情の変化にも注意しなければならないということ、認め<sup>(29)</sup>るにいたっていたのである。

⑭ 他方、「真実価格」〔つまり、当該事物を獲得するための労苦と骨折<sup>(30)</sup>り〕における諸変化について研究し、そして、そのような諸変化を測定するために「労働支配力」における諸変化を使用するということは、人時 (man-time, 延べ労働時間) が「労苦と骨折<sup>(30)</sup>り」についての一つの理にかなった尺度であるということ、当然のこととして含んでいる。それゆえスミスにとって、「伴われる辛さ」の一検査手段として労働の継続期間というものを弁護することが必要になるのであった。

⑮ このようにしてスミスは、財貨の「真実価値」〔つまり、その財貨によって他の人々に課することのできる労苦と骨折<sup>(31)</sup>り〕における諸変化の尺度は、その財貨と交換される貨幣の量ではなくて、その財貨が支配しうる労働の量であるとし、そしてこの支配しうる労働の量における諸変化がその財貨の「真実価格」〔つまり、その財貨を獲得するための労苦と骨折<sup>(31)</sup>り〕における諸変化の指標となる、と考えるのであるが、他方でスミスは、〔財貨のこのような「労働支配力」を実際に知るためには労働の時価を知ることが必要となるのであるが〕「離れた時と場所では、労働の時価が多少とも正確にわかるということはほとんどありえない」(W. N., p. 38. 大河内訳 I), 65ページ。), とするのであった。そしてこの問題にたいし

てスミスは、穀物の時価は一般にヨリ良く知られているとし、そして、「穀物の時価は労働の時価とつねに正確に同一割合にあるからというのではなく、ふつう入手できるもののなかでは、その割合にいちばん近づきうるものであるがゆえに」(W. N., p. 38. 大河内訳〈I〉, 66ページ。), 労働支配力における諸変化〔「真実価値」における諸変化〕の、したがってまた「真実価格」における諸変化の、一つのおおよその尺度としては、穀物支配力における諸変化で満足しなければならない、と考えたのであった。<sup>(32)</sup>

⑯ ところで、「真実価値」における諸変化〔労働支配力における諸変化〕のおおよその尺度として穀物が選ばれるためには、穀物は幾世紀にもわたって、ある安定的な労働支配力を、また、ある安定的な「真実価格」——〔「真実価格」における諸変化と「労働支配力」における諸変化との間にはおおよその相関があり、「真実価格」における変化は「労働支配力」における変化を引き起こすのであった〕——をもつものでなければならぬのであるが、スミスはこのような観点から、穀物の選択をまず経験的な根拠から基礎づけようとする<sup>(33)</sup>とともに、さらに、二つの道筋にそってその選択にたいする理論的な支持を与えようとするのであった。<sup>(34)</sup> <sup>(35)</sup>

⑰ たしかに、変化する真実価値の尺度として穀物を選ぶことに対してスミスがそこで与えている理論的な支持は非常に薄弱なものである。<sup>(36)</sup>だが、スミスによる尺度の選択そのものに対してたとえどんなに批判的であるとしても、彼がその尺度をどのように使用していたのかということを見ることは必要なことである。第11章における「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」を見る場合には、つぎのことを想起することが必要であろう。すなわち、そこでの問題は、我々が予期するであろうような一般的購買力における諸変化ではなく、労働支配力における諸変化をまた究極的には真実価格の諸変化を指し示すものとしての、銀の穀物価格での諸変化<sup>(37)</sup>といったことである、ということである。

(注)

- (1) 本稿では、Vincent W. Bladen, *From Adam Smith to Maynard Keynes: The Heritage of Political Economy* (Toronto: University of Toronto Press, 1974)——以下、Bladen [1974] と略記する——のなかで示されているブレイドゥンの所論をみる。
- (2) ブレイドゥンによれば、このようなことを意味する「真実価格」とは、ボウルディング (K. E. Boulding) の「人時価格」(‘man-time price’) にあたるものであり、それは、生産性と表裏の関係にあるもの、あるいは、ボウルディングの「変換係数」(‘coefficients of transformation’) と表裏の関係にあるもの、である、とされる。また、ブレイドゥンによれば、国民の富の増加、「豊富さ」(‘plenty’) の向上は、労働生産性の増進の結果であり、また、人間は扱いにくい自然から財貨を自分の労働でもって購買しているのだと考えるならば、この労働生産性増進は、「安価さ」(‘cheapness’) をもたらすと言うことができるのであり、そして、この生産性増進、安価さや豊富さのこの発展は、たしかに、配分プロセスと同様多くの研究に値するものである、とされる。Bladen [1974], p. 7.
- (3) このことに関連してブレイドゥンはつぎのような説明をくわえている。すなわち、スミスの議論を読んだり解釈したりするさいには、彼が「価値」という言葉を使用しているとき彼はそれによって、我々がこんにち「価値」という言葉によって意味しているものを意味していると断言したり、あるいはまた、彼が「価値」という言葉によってつねに同じものを意味していると断言したりしないよう注意しなければならない。経済学の揺籃期にあっては、術語は不精確で、はっきりとしないものであって、なんのこともわりもなしに同一の言葉が異なった意味で使用されているのを発見したとしても、それは驚くには足らぬことである。だが、議論の脈絡一般が、特定の事実を明らかにする、ということ認めることを拒否してもよいという理由はない。このことは、古典派の諸経済学者一般についての解釈に共通する一つの問題であり、また、たぶん、ヨリ一般的に、すべての経済学者についてもあてはまることなのである。Bladen [1974], pp. 7-8.
- (4) このことに関してブレイドゥンはさらにつぎのような説明を加えている。すなわち、ジード (C. Gide) とリスト (C. Rist) はそれらを混同して、「前においては、『真実』価格は労働に基礎を置く価格を意味していたのであった。今は、『自然』価格が、その生産費で評価される財貨の価格として定義されている。名前の変更は大きな意味を持たない。スミスがその双方において追求していたものは、市場価格の変動の背後につねに隠れているあの真の価値であった。それは同一の問題である、しかし新しい解答が与えられているのである」と述べているが  
(Charles Gide and Charles Rist, *A History of Economic Doctrines: From the Time of the Physiocrats to the Present Day*, trans. R. Richards, 2nd English ed. (Boston: D.

C. Heath & Co., n. d.)——ただし、ブレイドゥンはフランス語版第2版(1913年)の英訳である英語版第1版(1915年)を使用している——, pp. 94-95. 宮川貞一郎訳『経済学説史』〈上, 下〉〈東京堂, 1943年〉, 〈上〉, 111ページ。), けっしてそれは同一の問題ではなかったのである。スミスは一方のところでは生産性の諸変化に関心をいただいていたのであり, 他方のところでは, 市場での資源配分および均衡価格に関心をいただいていたのである。Bladen [1974], p. 8.

(5) Bladen [1974], pp. 7-8.

(6) このことに関連してブレイドゥンはつぎのような内容の説明を加えている。すなわち, 経済学者たちにとって「価値」という言葉は本文で見たような意味をもつのであるが, 他方でまた, 経済学者たちは一般に, 彼らが一商品の正常価値(normal value), 長期価値あるいは均衡価値とよぶところのあるものに, すなわち, もしも本文で見たような交換関係の, すべての決定因がなんの妨害もなしにその究極的な結末にまで作用しつくすための時間があつたならそのときに一商品が交換されると予期されるであろうなんらかの他の商品の量に, 関心をいただいている。これは明らかに, 観察可能なものでも測定可能なものでもなく, 事実, そのようなことはけっして達成されるものではないのである。すなわち, ある所与の一群の諸決定因の長期的均衡に到達する前に, きつと, それらの決定因のうちのいくつかのものは変化してしまっているのである。ところで, 本来, 「価値」という言葉は, 経済学の分野では, 本文で見たようなことを意味するものとして用いられるべきであり, そして, そのようなことを表すものとしての「価値」は, いま見たようなことを表すものとしての正常価値, 長期価値あるいは均衡価値とよばれているものとは区別されるべきものなのであるが, 現実には, そういった区別がなされないままに「価値」という言葉が使用されていることがあるのである。このことからしても, 我々は, スミスが「価値」という用語を我々よりもはるかに多くの意味で用いているということにたいしてはもっと寛大であるべきなのである。Bladen [1974], p. 9.

(7) ブレイドゥンによれば, このことは, スミスにおいても同様であつたのであつて, 彼は交換価値を「他の財貨にたいする購買力」として定義し, そして, 「諸商品の交換価値を規制する原理を究明する」ことを約束してはいるが(W. N., p. 28. 大河内訳〈I〉, 50ページ。), 彼は, 『国富論』第1篇第7章において, 諸商品の自然価格と市場価格を議論することへとすすんだのであつた, とされる。Bladen [1974], p. 9.

(8) Bladen [1974], p. 9.

(9) この間の事情をブレイドゥンはおおむねつぎのように説明しているといえる。すなわち, 二つの事物の間の交換関係における変化がなんらかの技術上の変化, したがって「真実価格」の変化の結果であつたとし, そしていま, 現に, 技術上

の変化〔→「真実価格」の変化〕の結果、AとBとの間の交換関係にある一定の変化が生じたとする。たとえば、従来、A 1単位はB 2単位と交換されていたのに、いまや、A 1単位がB 3単位と交換されるようになった、とする。ところで、相対的な交換価値におけるこの同一の変化は、③Bの「真実価格」が不変にとどまったままでのAの「真実価格」の上昇ということ〔AとBとの間で、Aの「真実価格」が相対的により高くなる→A 1単位がB 2単位とではなくB 3単位と交換される〕とも、あるいは、⑥Aの「真実価格」もBの「真実価格」もともに低下するがAの「真実価格」の低下よりもBの「真実価格」の低下のほうが大きかったということ〔AとBとの間で、Aの「真実価格」が相対的により高くなる→A 1単位がB 2単位とではなくB 3単位と交換される〕とも、あるいはまた、⑦Aの「真実価格」もBの「真実価格」もともに上昇するがAの「真実価格」の上昇よりもBの「真実価格」の上昇のほうが小さかったということ〔AとBとの間で、Aの「真実価格」が相対的により高くなる→A 1単位がB 2単位とではなくB 3単位と交換される〕とも、結びつけられるのである。Bladen [1974], pp. 9-10.

(10) Bladen [1974], pp. 9-10.

(11) Bladen [1974], p. 10. さらにブレイドウンは、諸国民の富は所与の資源の合理的配分のプロセスにおける改善といったことに依存するのと少なくとも同じほどに、またたぶんそれよりもはるかに多く、技術改良の歴史的プロセスに依存していると述べるのは、理にかなったことではないであろうか、としている。Bladen [1974], p. 10.

(12) ブレイドウンはつぎのような説明をなしている。すなわち、スミスは、人は「自分が支配できるその労働（すなわち、他の人々の労働）の量におうじて、富んでいたり貧しかったりするにちがいない」と述べている（*W. N.*, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。（ ）内はブレイドウン。）。たしかにこの考えはこんにち、聞き慣れないものである。しかしそのような考えはA. マーシャル（A. Marshall）やJ. M. ケインズ（J. M. Keynes）のなかに見いだされるのであり、また、カーライル（T. Carlyle）は、「6ペンス持っている人は、すべての人々に対して（6ペンスだけ）君主である。すなわち彼は——6ペンスの範囲だけ——料理人をして彼のために料理することを、哲学者をして彼に教えることを、国王をして彼を守ることを、命じるのである」と述べたのであった。真の経済プロセスを人々が仕事をしているとともに他人の仕事（work——なお、拙稿『アダム・スミスの価値尺度論』についての海外における諸研究<sup>(3)</sup>——1930年代——）『広島経済大学経済研究論集』第4巻第3号（1981年11月）において1938年のブレイドウンの論文を取り扱ったさい、わたくしは、これと同様な脈絡のなかで用いられている work という言葉を「所産」として理解していたのであるが、むしろそれは「仕事」あ

るいは労働として理解するほうがブレイドウンの議論に即しているように思える——)を支配しているというプロセスとみなすこのような見方は、古典派理論の展開、また後の、社会主義理論の展開において大きな重要性をもったものであり、そしてそれはいまでも意味をもつものなのである。(詳しくは、Bladen [1974], pp. 10-12 を見よ。)

- (13) Bladen [1974], p. 12.
- (14) Bladen [1974], p. 12.
- (15) このパラドックスについてのスミスの叙述に対するブレイドウンの論評については、Bladen [1974], p. 19 を見よ。
- (16) Bladen [1974], pp. 19-20.
- (17) ブレイドウンによれば、『国富論』の主題は、均衡ではなくて富 (wealth) であり、生産性の向上についての議論が、市場での交換の営みについての議論に優先している、とされる。Bladen [1974], p. 13.
- (18) Bladen [1974], p. 20.
- (19) ブレイドウンによれば、もし、第5章をこえてさらに、スミスの価値理論について述べる人々によって注意を払われることのないのがしばしばであった第11章での特定諸商品の「真実価格」における諸変化についての研究へと、進むならば、スミスが真になそうと試みていたことは、もっと明らかになる、とされる。Bladen [1974], p. 20.
- (20) Bladen [1974], pp. 20-21. なお、ブレイドウンによれば、スミスは第8章「労働の賃金について」のある箇所、労働の生産力の改善とともに「すべての物はだんだんと安価になったであろう。それらはヨリ少ない量の労働で生産されたであろう」(W. N., p. 64. 大河内訳くI), 110ページ。)ということを説明しており、そしてこの箇所もまた価値についてのスミスの理論を取り扱う諸議論において一般に無視されているのではあるが、この箇所は、「真実価格」、真の「安価さ」に対するスミスの関心ということを示すものである、とされる。Bladen [1974], p. 20.

そしてまたブレイドウンによれば、第8章でのいま見た一節が含まれているパラグラフの次にくるパラグラフのなかで示されている文章では、「安価な」という言葉の用法のあいまいさとともに「真実価格」と「価値」とのあいだのちがいが鮮明に表れている、とされる。すなわち、「たとえすべての物が真にヨリ安価になったとしても [すなわち、たとえすべての物の「真実価格」が低下したとしても]、外見上、まえより高価になったものも少なくないかもしれない。つまり、ヨリ多量の他の財貨と交換されるものも少なくないかもしれない。たとえば、大多数の職業において労働の生産力が10倍に増進したと……仮定しよう。他方、ある特定の職業では労働の生産力が2倍にしか増進しなかったと……仮定しよう。

大多数の職業における1日分の労働の生産物を、この特定の職業における1日分の生産物と交換するにあたっては、前者における所産 (work) のもとの量の10倍量は、後者における所産のもとの量の2倍量しか購買しないことになるであろう。後者のある特定量は……、まえより5倍も高価になっているようにみえるであろう。けれども実は、それは2倍だけ安価になっているはずなのである。なるほど、それを購買するのに5倍の量の他の財貨が必要になったとはいえ〔その「価値」が5倍になったとはいえ〕、それを購買するのにも生産するのにも、わずか半分量の労働しか必要としないであろう〔その「真実価格」は半分に低下しているであろう〕。(W. N., pp. 64-65. 大河内訳〈I〉, 110-111ページ。〔 〕内は中川。) Bladen [1974], pp. 20-21.

- (2) いま、一事物の「真実価格」の経時的な諸変化はその当該事物の「価格」の経時的な諸変化に反映されると想定し、特定諸財貨のあいだの相対的な価値における長期的な諸変化はそれらの財貨の相対的な諸真実価格における諸変化と、同一方向でかつ、おおよそ同一の大きさのものになるとすると、そのような事情は、具体的にはたとえばつぎのような情況として示すことができよう。たとえば、当初においては、財貨A 1単位は財貨B 2単位と交換されていた(したがって財貨Aの「価格」は財貨Bの「価格」の2倍)、つまり、財貨A 1単位は財貨B 2単位に相当していた、そして同時に、財貨A 1単位の「真実価格」は財貨B 1単位の「真実価格」のおおよそ2倍であった、だが、長期において、財貨A 1単位は財貨B 2/5単位と交換されるようになり(したがって、財貨Aの「価格」は財貨Bの「価格」の2/5)、つまり、財貨A 1単位は財貨B 2/5単位に相当するようになり、かつ、財貨A 1単位の「真実価格」がおおよそ1/10に低下(この低下は財貨Aの「価格」の低下に反映される)、財貨B 1単位の「真実価格」がおおよそ1/2に低下(この低下は財貨Bの「価格」の低下に反映される)している、といったような情況である。この場合には、財貨Aと財貨Bとのあいだの相対的な価値における変化は、財貨A 1単位=財貨B 2単位(財貨Aの「価格」は財貨Bの「価格」の2倍)から財貨A 1単位=財貨B 2/5単位(財貨Aの「価格」は財貨Bの「価格」の2/5)への変化となり、当初財貨A 1単位は財貨B 2単位に相当していたのにいまや財貨A 1単位は財貨B 2/5単位に相当するということになっている。他方、当初財貨A 1単位の「真実価格」は財貨B 1単位のおおよそ2倍であったのに、いまや、財貨A 1単位の「真実価格」は財貨B 1単位の「真実価格」のおおよそ2/5ということになっている。それらの財貨各々の「真実価格」の変化はそれらの財貨各々の「価格」の変化に反映され、それらの財貨のあいだの相対的な価値における変化は、それらの財貨の相対的な諸真実価格における変化と同一方向でかつ、おおよそ同一の大きさ、となっているのである。上記③および注9も見よ。

- (22) Bladen [1974], p. 21. ブレイドウンによれば、本稿注20でみた「けれども実は、それは2倍だけ安価になっているはずなのである」というスミス の例を用いるとすれば、その文章に「おおよそ」という言葉を加えて、「けれども実は、それは (おおよそ) 2倍だけ安価になっているはずなのである [(その相対的な価値、交換価値は5倍になっている——注21での例では、財貨B 1単位=財貨A1/2単位から財貨B 1単位=財貨A5/2単位——が、) けれども実は、その「真実価格」においては、それは、おおよそ2倍だけ安価に、つまりその「真実価格」はおおよそ半分になっているはずなのである]」(〔 〕内は中川) とすれば、それだけでよいのである、とされる。Bladen [1974], p. 21.
- (23) Bladen [1974], p. 21.
- (24) ブレイドウンはつぎのようなスミスの文章を引用している。「1時間の辛い作業におけるほうが、2時間のやさしい仕事におけるよりも、いっそう多くの労働があるかもしれない。また、習得するのに10年の労働がかかる職業に1時間はげむばあいのほうが、平凡なわかりきった業務で1ヶ月働くばあいよりもいっそう多くの労働があるかもしれない。」(W. N., p. 31. 大河内訳 < I >, 55ページ。) Bladen [1974], p. 21.
- (25) Bladen [1974], pp. 21-22. このことについてブレイドウンはおおむねつぎのような説明をくわえているといえよう。すなわち、改良の過程において要素混合率 が増変するときの生産性を研究する場合には、我々はこれと同じ問題に直面する。たとえば、検討される期の当初においては、一つの種類の労働 (すなわち、一つの種類の投入物)  $x$  単位ともう一つの種類の労働  $y$  単位とが、特定生産物を  $A$  単位だけ生産した、と仮定しよう。もしも、いまや  $0.5x$  単位と  $0.5y$  単位とが同一量すなわち  $A$  単位だけ生産するようになっていいるならば、その商品の真実価格は半分になった、また、この生産業における生産性は2倍になった、と言われていることができる。だが、技術変化が混合率の変化を伴うと仮定しよう。こういったことはほとんど確実におこることなのであるが、たとえば、 $0.3x$  単位と  $0.8y$  単位とが  $A$  単位を生産するかもしれない。この場合には、人は、真実価格は低下したと言うことであろうけれども、その低下の程度についてのある満足のいく測定値を与えることはできないであろう。また、もしも新しい混合率が  $0.5x$  単位と  $1.2y$  単位とであったならば、真実価格が低下したのか、上昇したのか、あるいは同一のままにとどまったのかということも満足のいくように確定することはできないであろう。もちろん、もしもその  $x$  という単位数と  $y$  という単位数との間に相当関係を確立することができるならば、一つの答えを与えることができるであろう。だが、その相当関係を市場から得ようというのは、一つの非常に疑わしいやり方である。しかしながら、この問題はいまもなお、生産性の変化について研究する人々を悩ませているものなのである。ただし、その問題によって悩ま



れるその度合いは、多くは、どの程度の正確さを求めるかということに依存しているのである。たとえ正確な解答を得ることは不可能であるとしても、おおよその、しかしことによるとたいへん有用な解答の可能性を探求することそれ自体は、はたして拒否されるべきことなのであるか。Bladen [1974], pp. 21-22.

- (26) ブレイドウンはつぎのような説明をなしている。すなわち、スミスは、「しかし、たとえ労働はすべての商品の交換価値の真の尺度ではあっても、それらの商品の価値がふつう評価されるのは、労働によってではない」(W. N., p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ。), それは「労働の量か、または他のある商品の量によって評価されるよりも、貨幣の量によって評価される場合がいっそう多い」(W. N., p. 32. 大河内訳〈I〉, 56ページ。)と述べている。ところで、もしスミスがここで真に語っていたのが厳密な意味での交換価値〔すなわち、市場において当該財貨（もしくはサービス）と交換される他の財貨もしくはサービスの量〕についてであったとすれば、こういった文言は陳腐な文言というように思えることであろう。だが、スミスはここでは、ある所与の時点における諸相対価値といったものに関心を怠っていたのではなく、彼が特定諸商品の「真実」価値と考えるもの〔それらの特定諸商品によって他の人々に課することのできる労苦と骨折り〕の長期間にわたっての諸変化といったことに関心を怠っていたのであり、そしてスミスは、そういったことのためには貨幣は不十分なものである、すなわち、貨幣価格における変化はこの「真実価値」における諸変化を良好に指し示すことができない、とするのである。つまり、「けれども金銀は、すべての他の商品と同じようにその価値が変動し、安価なこともあれば高価なこともある……。ある特定量の金銀で購買または支配できる労働の量は、……たまたま知られている諸鉱山の豊度の程度につねに依存する……。アメリカの豊富な鉱山が発見された結果、16世紀に、ヨーロッパにおける金銀の価値は以前の約3分の1に下がった。それらの金属類を鉱山から市場へもたらすのに費やす労働がいっそう少なくなったので、それらの金属類が市場へもたらされたときに、購買または支配できた労働もいっそう少なくなった。……それ自身の価値がたえず変動するような商品は、他の諸商品の価値の正確な尺度とは、けっしてなりえない」(W. N., pp. 32-33. 大河内訳〈I〉, 57ページ。), ということになるのである。もちろん、貨幣は、我々の現代的な意味での価値の、最善の尺度である。というのは、そのばあい我々はある所与の時点での諸相対価値について語っているのであり、そしてそれらの所与の時点では、観察されることのできるものは、相対的な諸貨幣価格であるからである。だが、スミスが貨幣は不十分な尺度であるとするばあい、それは、真実価値の諸変化の尺度としてなのである。Bladen [1974], p. 22.

(27) 本稿注20を見よ。

(28) ブレイドウンによれば、スミスが貨幣金属の価値における変化に言及したとき

には、彼は、我々ならそうしたであろうように一般的な購買力における諸変化ということに関心をいただいていたのではなく、労働支配力における諸変化ということに関心をいただいていたのであり、そして、銀は「それが費やさせる労働がもっと少なくなったので……もっと少ない労働しか支配できなかった」(W. N., p. 32. 大河内訳〈I〉, 57ページ。)というスミスの言明は、貨幣金属を良き尺度としては排するものであるけれども、それはまた同時に、「真実価格」あるいは人時価格 (man-time price)——このようなものは、記録の欠如のために長期間にわたって確定することの不可能なものである——における諸変化の尺度として、「労働支配力」——これは、記録の不十分さのゆえに長期間にわたって確定することの困難なものである——における諸変化といったものを受け入れるための、一つの根拠を提供してもいる、とされる。Bladen [1974], p. 23.

(29) Bladen [1974], pp. 22-23.

(30) Bladen [1974], p. 23. ブレイドゥンは、スミスがそのような弁護をなしているものとしてスミスのつぎのような文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態、また彼の熟練と技能が通常の程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働は、より大きな分量のこれらの財貨を購入することもあれば、より小さい分量のこれらの財貨を購入することもあろう。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購入する労働の価値ではないのである。」(W. N., p. 33. 大河内訳〈I〉, 57-58ページ。) Bladen [1974], p. 23.

なお、ブレイドゥンによれば、うえの引用文では価値という言葉がきわめて不精確に用いられているが、その意味しているところは、疑いなく明確なものである、すなわち、「変動するのは、それらの財貨の価値(すなわち、真実価格)であって、労働の価値(すなわち、不効用)ではないのである」ということを意味しているのである、とされる。Bladen [1974], p. 23. ( )内はブレイドゥン。また、このことに関連してブレイドゥンはつぎのような内容の指摘をなしている。それによれば、スミスはたしかに価値という言葉の不精確に使用しているのであり、そしてそのことを批判するのは正当なことである、しかし、著者が一つの言葉を三つあるいは四つの異なる意味で使用していることがまったく明らかであるのに、その著者がその言葉を一つの意味でのみ用いていたと想定することによってその著者の労作を無意味なものと考えてしまうことは、正当なことでも有用なことでもないように思える、とさえる。詳しくは Bladen [1974], pp. 23-24 を見よ。

(注30は次ページにつづく)

さらにまた、ブレイドウンによれば、不効用といったものが、スミスの考えているほど明確に、労働の継続期間というものに結びつけられるのか、また、1時間の労働の不効用はずっと不変のままにとどまってきたのか、といえば、それについては否定的であらざるをえないし、また、そういったものは折々測定するといったことのできないものなのである、だが、おおよそにであれ、「真実価格」にどのような諸変化が生じてきたかを知ることは、意義のありつづけることであり、たとえ、その諸変化をA. マーシャルが「真実の費用」(‘real cost’)と呼ぼうとしたものにおける諸変化と同一視することはできないとしても、そうなのである、とされる。Bladen [1974], p. 24.

- (31) ブレイドウンによれば、スミスは、「それゆえ、同一の時と場所では、貨幣は、すべての商品の真の交換価値の正確な尺度である」(*W. N.*, p. 37. 大河内訳<I>, 64ページ。)ということを確認しつつも、「ある特定の商品の、さまざまな時と場所におけるさまざまな真実価値、すなわち、ある特定の商品が、さまざまな場合にそれを所有する人たちに与える、他の人々の労働を支配する力のさまざまな程度」(*W. N.*, p. 38. 大河内訳<I>, 65ページ。)を比較するためには、「ふつうその商品を売ってそれと引き換えに得た銀の量の違いよりも、むしろ、それらのさまざまな量の銀が購買しえた労働の量の違い」(*W. N.*, p. 38. 大河内訳<I>, 65ページ。)を比較することが必要であるとした、とされる。Bladen [1974], p. 24.
- (32) Bladen [1974], p. 24.
- (33) ブレイドウンは、スミスのあげる経験的根拠を示すものとして、「穀物で納めることになっている地代は、貨幣で納めることになっている地代にくらべて、その価値をはるかによく保持してきた」(*W. N.*, p. 34. 大河内訳<I>, 60ページ。)というスミスの文言を引用している。Bladen [1974], p. 24.
- (34) ブレイドウンは、スミスは一つには、「労働者の生活資料」である穀物を所有する人は労働を支配するということから、穀物を選ぶことにたいする理論的な支持を与えている、とみて、つぎのようなスミスの文言を引用している。「それゆえ、遠くへだたった時点では、等量の穀物のほうが、同一の真実価値に近いものをもっている。すなわち、等量の穀物によってその所有者は、他の人々の労働の同一量に近いものを購買または支配することができるだろう。ここでことわっておくが、穀物の等量のほうが、他のどんな商品の等量よりもいっそうこの任務を果たしやすいというだけのことである。穀物の等量ですらも、この任務を正確に果たすものではないからである。労働者の生活資料は……場合によって非常に異なることがあるのである」(*W. N.*, p. 35. 大河内訳<I>, 61ページ。)。Bladen [1974], p. 25.

また、ブレイドウンによれば、スミスはあとのほうでさらに、穀物を選ぶことにたいする理論的な支持を与えるものとして、18世紀の農業革命にもかかわらず、

穀物の「真実価格」は長期にわたって安定的であったということあげている、とされる。そしてブレイドゥンは、そのことをあらわすものとして、『国富論』第1篇第11章における「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」でスミスが示しているつぎのような文章を引用している。「そのうえ改良のあらゆる段階において土壌と気候が同じであれば、等量の穀物の生産には平均的にほぼ同量の労働を必要とするであろう……。というのは、耕作が進歩しつつある状態での労働生産力の不断の増大は、農業の主要な用具である家畜の価格の不断の増大によって多かれ少なかれ相殺されるからである。それゆえ、われわれは、以上すべての理由から、いかなる社会状態、いかなる改良の段階にあっても、等量の穀物は他のいかなる等量の土地の原生産物よりも、いっそうよく等量の労働を代表するであろう……。ということをおぼえて確信してよいだろう。」(W. N., p. 187. 大河内訳〈I〉, 309ページ。) Bladen [1974], p. 25.

(35) Bladen [1974], pp. 24-25.

(36) ブレイドゥンによれば、収穫逡減というリカードウの脅威の認識といったことはまだ幾十年も先のことであったけれども、本稿注34で見られたような、費用逡増を促進する要因と費用逡減を促進する要因という対立的な要因がたがいに相殺しあうであろうといった予想は、たしかに、無理なものであった、とされる。Bladen [1974], p. 25.

(37) Bladen [1974], p. 25.

## V. W. ブレイドゥン(1974)についての覚書：結びに代えて

多くの場合、『国富論』第1篇第5章は「アダム・スミスの価値尺度論」の中心的な章とみられるのであるが、『国富論』の主題を生産性の向上につれて増加する諸国民の富についての考察としてとらえるブレイドゥンは、『国富論』第1篇第5章は交換価値の決定<sup>●</sup>といったことを取り扱うのではなく、その第5章さらに第11章においてスミスが取り扱っていたことは、生産性の変化の測定といったことにかかわるものであった、という見方を示すのであった。

そして、ブレイドゥンによれば、スミスはその問題を「真実価格」の変化の測定という形で取り扱った、すなわち、スミスは、用語の使用の仕方において不精確ではあったが、事物の「真実価格」を、生産性と表裏の関

係にある「その事物を獲得するための労苦と骨折り」とし、そしてその意味での「真実価格」における変化の測定という問題を取り扱った、とされるのであった。

また、ブレイドウンによれば、他方でスミスは、「労働支配力」としての所得という彼のもっていた考えをつうじて事物の「真実価値」とは「その事物によって他の人々に課することのできる労苦と骨折り」であるという考え方を示し、その「真実価値」は「その事物で購買または支配しうる他の人々の労働の量に正確に比例する」とし——なお、ブレイドウンによれば、この場合にもスミスは必ずしも一貫した用語法をとっているわけではないが、こういったものとしての「真実価値」は、市場において当該事物と交換される他の財貨もしくはサービスの量としての「価値」、「交換価値」とは別のものと考えられるべきものである、とされるのであった——、そしてその「労働支配力」における変化が、当該事物の「真実価値」における変化の尺度を提供するとともに、さらに、当該事物の「真実価格」における変化のおおよその、しかし最も良好な指標を提供する、と考えた、とされるのであった。

このように、ブレイドウンのみるところによれば、スミスは「支配される労働の量」における変化を「真実価値」における変化の尺度、「真実価格」における変化のおおよそのしかし最も良好な指標と考えた、とされるのであるが、さらにブレイドウンによれば、スミスは労働をそのようなものとして使用するためには、一つには質的に異なった種類の労働の量の間の相当関係を確立しなければならないという問題があるということを認識していたのであり、そしてこの問題に対してはスミスは「市場のかけひきや交渉」から生じる評価の使用といった非常に疑わしい解決法を与えた、とされるのであった。

また、ブレイドウンはスミスの議論そのものの妥当性については否定的な見方をとりつつも、彼のみるところによれば、当該事物によって他の人々に課することのできる労苦と骨折りとしての「真実価値」における変化

の尺度、当該事物を獲得するための労苦と骨折りとしての「真実価格」における変化の指標として当該事物によって「支配される労働の量」における変化を用いるためには労働の量（延べ労働時間、労働の継続期間）が「労苦と骨折り」つまり不効用についての尺度でなければならないということから、スミスは、等量の労働は時と場所のいかんを問わず等しい不効用を伴うということを主張しようとした、とされるのであった。

他方、また、事物の「真実価値」における変化の尺度さらに事物の「真実価格」における変化の指標として当該事物が「支配しうる労働の量」における変化を用いるためには当該事物が実際に「支配しうる労働の量」を確定しなければならず、そしてそのためには労働の時価を知る必要があるのであるが、ブレイドウンによれば、このことに関してスミスは、「離れた時と場所では、労働の時価が多少とも正確にわかるということはほとんどありえない」のにたいし穀物の時価は一般にヨリ良く知られており、しかもそれはふつう入手できるもののなかでは労働の時価に対して、最も同一に近い割合にあるものであるということから、「労働支配力」における変化のおおよその尺度としては当該事物の「穀物支配力」における変化で満足しなければならないとし、そしてそのようなものとして穀物を選ぶことを正当化するためにスミスが与えている議論そのものの妥当性ということについては問題はあるが、スミスは経験的な根拠および理論的な根拠を示すことによってその選択に対する支持を与えようとしたのだ、とされるのであった。

そして、ブレイドウンによれば、スミスは彼の言う「真実価格」の変化についてのおおよその指標しか与えることができず、また、その問題についての彼の議論の展開には不備、欠陥が存在しはするのであるが、彼の関心そのものは当を得たものであり、彼はそこでは、現代においてもまだ解決されていない生産性の測定、生産性の変化の測定といったことにかかわる問題を取り扱い、また、それにまつわる諸困難の存在を認識するとともにそれらの困難のうちのいくつかのものに取り組んでいたのである、とさ

れるのであった。

〔付記〕

わたくしは本誌第2巻第3号(1979年12月)143ページの脚注において、本誌第1巻第4号(1979年3月)240ページにおけるわたくしの叙述事項の一部を訂正したのであるが、本稿でみてきたことからわかるように、その訂正内容はわたくしの誤解にもとづく誤ったものであるので、この場をかりて、あらためてその訂正を取り消させていただきたい。